

### 入賞者一覧(敬称略)

#### ●一般の部

- 【最優秀賞】「心が通うふれあい」  
由利 巧(48)＝八戸市、会社員
- 【優秀賞】「私の玄武」  
小笠原 加寿江(61)＝八戸市、無職
- 「曖昧だから」  
佐々木 宏恵(53)＝階上町、教員
- 【佳作】「人差し指を離してみよう」  
田中 三枝子(73)＝階上町、主婦
- 「未知の世界」  
立花 夢歌(19)  
＝三沢市、八戸学院大短期大学部2年

# 田村さん(八戸)

一般の部

## 最優秀賞

## 私の天鐘 入賞作品紹介

### 「私の天鐘」 入賞作品決定

デーリー東北新聞社が募集した第4回「コラムに挑戦」私の天鐘の入賞作品が決まった。若手の応募が増え、幅広いテーマに挑んだ読者の応募のある作品が集まった。各部門の入賞者と、それぞれの最優秀賞に輝いた作品全文を紹介する。

応募総数は297名。昨年の97点を大きく上回った。内訳は、一般の部(大学生を含む)が33点、高校生の部が昨年より146点増の154点、小・中学生の部が同20点増の70点だった。

選考会は、10月3日に八戸市のデーリー東北新聞社で開催。八戸学院大学短期大学部ライオンズ学科長・教授の茂木典子氏と、本紙「天鐘」執筆担当の計4人で、テーマや論旨、表現方法などについて審査、入賞作品を決定した。

「私の天鐘」は、読者に日々の暮らしの中で感じている思いや疑問などを、さまざまなテーマで切り口で本紙1面コラム「天鐘」と同じ形に仕立て、字数内で自由につつもらうことを目的としている。表彰式は20日午前11時から、本社6階メディアホールで行う。



3部門の応募作品について意見を交し、審査した選考会。3日、デーリー東北新聞社

### 総評

人の書いたコラムを読むのは楽しい。同じ時代に生き、同じ物を見て、同じニュースを聞いているのに、感じ方はそれぞれ。共感するものでも、表現によって読み手の心への染み込み方が変わってくる。今回寄せられた「私の天鐘」の印象である。

4回目の今年は、高校生と小中学生からの応募が大幅に増え、10代の執筆意欲の高さを強く感じた。何人かの中高生が時事問題に挑戦してい

たのも特筆したい。異常気象と災害、世界平和など、社会にしっかりと関心を持っていることが窺えた。小生からの唯一の作品は、実体験を通じた問題意識が素直に描かれ、思わず考えさせられる力強さがある。

最も増えた高校生の間、多くを占めた題材が、いじめと誹謗中傷の温床にもなる委員制交流サイト(SNS)の功罪や部活動など、10代の視点を通して世相が垣間見える興

## 日々「感じる」ことが大切

味深さがあつた一方で、テーマの情景描写からの導入が効くが似通っているのが気になった。中学生は多彩なジャンルに、積極的に取り組み、文章も起承転結ができていた。ただ、高校生にも言えることだが、全体的に読者に伝えたい内容を絞り切れていないのが惜しまれる。

多くの応募作品が上位を選ぶのは難しかったが、最優秀作品の評価ポイントを紹介してみよう。一般の部の「心が通うふれあい」は、行方不明になった男児を救出したボランティア男性と絡めて「社」のつながりを描いた。時を待たず話題を用い、読み手の心にすんなり入ってくる言葉遣いのセンスを感じた。

高校生の部の「金魚すくいは、身近な場面からベクトラムの明暗を浮かび上がらせている。柔らかい文章の中にも、中々に伝えている。便利だけれど、それだけでは表現し切れない。日常のちょっとした出来事もコラムに仕立て、書き続けていけば、「言う」は、中学生らしい瑞々しさをもち、大事にしたい。感性が新鮮。住んでいる地

域の情景描写からの導入が効果的。中学生は多彩なジャンルに、積極的に取り組み、文章も起承転結ができていた。ただ、高校生にも言えることだが、全体的に読者に伝えたい内容を絞り切れていないのが惜しまれる。

多くの応募作品が上位を選ぶのは難しかったが、最優秀作品の評価ポイントを紹介してみよう。一般の部の「心が通うふれあい」は、行方不明になった男児を救出したボランティア男性と絡めて「社」のつながりを描いた。時を待たず話題を用い、読み手の心にすんなり入ってくる言葉遣いのセンスを感じた。

高校生の部の「金魚すくいは、身近な場面からベクトラムの明暗を浮かび上がらせている。柔らかい文章の中にも、中々に伝えている。便利だけれど、それだけでは表現し切れない。日常のちょっとした出来事もコラムに仕立て、書き続けていけば、「言う」は、中学生らしい瑞々しさをもち、大事にしたい。感性が新鮮。住んでいる地

域の情景描写からの導入が効果的。中学生は多彩なジャンルに、積極的に取り組み、文章も起承転結ができていた。ただ、高校生にも言えることだが、全体的に読者に伝えたい内容を絞り切れていないのが惜しまれる。

多くの応募作品が上位を選ぶのは難しかったが、最優秀作品の評価ポイントを紹介してみよう。一般の部の「心が通うふれあい」は、行方不明になった男児を救出したボランティア男性と絡めて「社」のつながりを描いた。時を待たず話題を用い、読み手の心にすんなり入ってくる言葉遣いのセンスを感じた。

高校生の部の「金魚すくいは、身近な場面からベクトラムの明暗を浮かび上がらせている。柔らかい文章の中にも、中々に伝えている。便利だけれど、それだけでは表現し切れない。日常のちょっとした出来事もコラムに仕立て、書き続けていけば、「言う」は、中学生らしい瑞々しさをもち、大事にしたい。感性が新鮮。住んでいる地

域の情景描写からの導入が効果的。中学生は多彩なジャンルに、積極的に取り組み、文章も起承転結ができていた。ただ、高校生にも言えることだが、全体的に読者に伝えたい内容を絞り切れていないのが惜しまれる。